

追悼

丸山学兄——と呼ばせてもらう。広島高等師範学校で、私より三年の上級生として兄事していた人だからである。年令の方は、私はおくてだったから、丸山兄より一つ上の筈である。

高師在学中、丸山兄は学芸部の輝かしい先輩として、私にとって畏敬の対象であったばかりでなく、恩師齋藤清衛博士がその部長だった関係もあって、学校での専攻部門は違っていたが、同じ芸文の道の先輩として、丸山兄は、私の内部につねに確乎として存在している。私が卒業する年、広島に文理科大学が開設されることとなり、丸山兄は奉職中の熊本中学校を辞して英文科に、私は国文科に第一期生として入学した。高師以来たがいの身に共有していた雰囲気を持ち越した形となった。むろん、学芸部とか、文芸部とかいうものは、大学にはなかったが、第一期生同志の責任感から、学風樹立への情熱を、言わず語らず持ち合わせていた。そのことを高師からの心のつながりの上で、十分納得し合っていたように思う。

追　　しかし、丸山兄との一層深い心の交流は、同じ国文学の同志蓮田善明を介してであった。蓮田

は丸山兄の中学時代からの親友で、丸山兄の友情は、蓮田の生前はもとより、その死後まで渝ることとはなかった。蓮田文学碑の建設から、遺族への同情と援助にいたるまで、稀に美しい友情の証しを眼のあたりに見てきた記憶は、今でも私の心を清々しくさせる。

丸山兄も蓮田も、陸軍予備将校として前後二度応召した。初度は二人とも中支であった。二度目は、丸山兄は熊本部隊に留まったが、蓮田は南方戦線に赴いた。特に二度目は同日の応召で、丸山兄は母校高師の教授、蓮田は成城高校の教授であったが、蓮田の熊本へ向かう同じ列車に、丸山兄は広島で乗り込んだ。その間の経緯は、蓮田の遺稿詩歌集『をらびうた』に記されている。つぎの引用がそれで、これによると、蓮田は東京出発に先立ち、丸山兄が日と同じくして召集を受けたとは知らず、せめてもの別離の言葉を交すべく、駅頭に古友を呼ぶ電報を打っていたものと思われる。

(昭和十八年十月) 二十七日午前四時すぎ広島駅とききて窓をひらき別れゆくべき古友の出で
迎へつるやと目さがせど求め来る人もなし、唯三、四輛前のあたりに学生ら多くつどひて盛んなる
歓送歌をうたへるが、この朝はやき静間の駅にどよもせり。ふと思ひかけず窓に寄る人ありて我をよべるに、
そはこの土地に又わがしれる若きふたり、君の求めたまふ人は同じく召されて君と同車せんとて
今かしこに学生の送れるがそれなり、われらそのしるべしおくべしと駆け去るを

いでゆく我を送るべき

友また召され今ここに

その教へ子らつどひゐて

朝開どよもす歎送歌

友よ ゆかりのつきずして

再びうくる大御召

こたびは時もとひしとふ

車も同じ命また

ああうたひつぐ若人が

屍草生すをたけびを

さゝげ終りて徐ろに

車いでゆく今ここに

悼 一人は昭和二十年に、今一人はそれから二十五年後に、前後して二人の心友を私は喪ったこと

になる。

追 昨夏、蓮田の二十五回忌法要が水前寺の共済会館で営まれたあと、私は一人垂玉温泉に向かっ

た。その山口旅館は、蓮田が第一次召集解除後、暫く保養した宿である。故人ゆかりの山宿に、丸山兄の世話で静かな一夜を明かすことができた。

山をくだって、熊本駅から発つ時、お孫さんを伴った丸山兄夫妻が、ホームまでわざわざ見送ってくださった。あの時が、丸山兄との永久の別れとなったわけである。

(四六・二)